

読者の心を捉えるストーリーの秘訣と 65周年へのメッセージ

小説はエンターテインメント 現実と混同せず楽しんでほしい

私が連載していた近代セールスやバンクビジネスも
まだまだ面白い企画が眠っていると思います。
それを見つけてさらに読者をひきつけてください

いすね。2009年、WOWOWで
放映された『空飛ぶタイヤ』の連続ド
ラマが高く評価され、日本民間放送連
盟賞やATP賞テレビグランプリのド
ラマ部門最優秀賞などを受賞。そこで
私の小説は映像と相性が良いのかなと
思っていたところに『下町ロケット』
の直木賞受賞もあって、TBSから『半
沢直樹』のドラマ化の話が来ました。
『半沢直樹』は、話の設定からなかな
か企画が通らなかつたようですが、大
学の同窓でもある福澤克雄監督や伊與
田英徳プロデューサーが熱心に上層部
を説得してくださったようで、13年に
ドラマ化。それが当たり、小説も多く
の人に読んでいただけるようになりました。
—半沢直樹シリーズでは銀行員や金融
庁がクローズアップされ、「こんな銀行
員や検査官が現実にいるのか」と話題に
なりましたね。

池井戸 銀行など特定のジャンルを
舞台とするビジネス小説は、その業界
で実際に働く人たちに受け入れてもら
えるケースと、逆に「あり得ない」と拒
絶されるケースに分かれます。その点、
半沢直樹シリーズは銀行員も喜んで読
んでいるという声を多数聞いており、
登場人物や人間関係、ストーリーに共
感していただけていると感じます。
ただ私が書くビジネス小説は基本的
には読者に楽しんでいただくエンター
テインメントです。現場ではあり得ない
ことも書くのですが、それがリアルだ
と感じる読者は必ず一定数います。
半沢直樹シリーズではオネエ言葉を
使う金融庁検査官・黒崎駿一が登場し
ます。これは「現実にはこんな検査官
はいませんよ」ということを読者に理
解していただくため、単行本化すると
きにあってオネエ言葉を使うキャラに
変えたのですが、それでも「実在する」
と思っただ人はいたようで、ドラマを見
た視聴者から金融庁に「お宅の職員は
あんな言葉遣いをするのか」といった
クレームが入り、金融庁に迷惑をかけ
たようです（苦笑）。

近代セールス社
創業65周年
記念インタビュー

池井戸 潤

氏に聞く

『半沢直樹』や『下町ロケット』など、
ビジネス小説で多くの人の心を捉える
池井戸潤氏。9月28日には『民王』の
待望の続編『民王 シベリアの陰謀』
(KADOKAWA) を発売する。近
代セールス社からは『金融法務がマン
ガでラクラクわかる本』『改訂新版』
これだけ覚える融資の基礎知識』など
を発売し、後者は20回も重版するなど
ロングセラーだ。そんな池井戸氏にお
話を伺った（以下、敬称略）。

ビジネスの現場を 面白おかしく描く

—池井戸さんは次々とヒット小説を世
に送り出しています。ご自身の小説が支
持される理由はどこにあるとお考えで
すか。

池井戸 テレビドラマの影響が大きい